

# ジェンダー平等とワーク・ライフ・バランス



## 貞許礼子

室蘭工業大学くらし環境系領域  
[050-8585] 室蘭市水元町27-1  
特任教授, 博士(工学).  
専門は高分子化学, 生体関連高分子.  
sadamoto@mmm.muroran-it.ac.jp  
www.muroran-it.ac.jp/ge\_ufr/

この「先輩からのメッセージ —仕事と私事—」は高分子学会男女共同参画委員会が企画しているページである。私は平成28年度からこの委員会のメンバーとなったことから、今回の執筆機会をいただいた。ここでは、ジェンダー平等に関する問題と私のこれまでのかかわりを振り返ってみたい。なお、日本語では「男女共同参画」という言葉がよく使われているが、単にgender equalityという意味では「ジェンダー平等」という言葉を使わせていただく。

「女だから」と初めて言われて驚いたのは小学校時代、確か学級委員の集まりで委員長を選ぶときであったと思う。話し合いで私に決まりそうになったとき、教師が「あなたは女だから委員長じゃなくて副委員長が良いでしょう」と言ったのである。当時は「ジェンダー平等」という言葉も知らなかったが、「女だから何だと言うのだろう」と疑問に思ったことを今でも覚えている。私は公立の小・中学校から都立の(共学の)高等学校に進んだが、その事件(私にとっては事件であった)以外はとくに性差別を感じる機会もなく、予備校を経て大学に入学した。

次に性差別(というか、この場合は女性であることによるちょっとした「不便」であるが)を感じたのは東京大学理科1類1年生のときである。それは、出席をとる講義で面白くないものがあると、男子学生は「代返」など頼んで時間の有効利用に役立てる者が居る中、クラス50数名中たった2名の女子学生にはそれが不可能ということであった。予備校では当時でもカードにより出席状況が管理されていたが、大学ではまだ導入されておらず、名前を呼ばれたら返事をするタイプの出席確認が多かったのである。もっとも最近では学生による講義の評価などもあり講義の質も一定レベル以上に保たれ、出席が時間の浪費に思えるような講義はたぶんほとんどの大学で存在しないであろう。

大学院時代にはいくつか「これが性差別なのか」と思う経験をし、その中には(当時の)私にとっては深刻なものもあったのであるが、一つだけ紹介することにする。研究室の先輩が企業から奨学金をもらっているという話を聞いて興味をもった私が、指導教官からその企

業の担当者に紹介されたとき、担当者が「うちの会社は博士号をとった女性は採用しないことになっています」と言ったのである。男女雇用機会均等法が施行されてから5年以上経った時期のことだったと思う。知人が勤めていた別の会社では当時でもすでに博士号をもつ女性の研究者が活躍していることを聞いていたので、「いろいろな会社があるものだ」という理解をすることにし、その企業の奨学金や就職については考えないことにした。ところがその企業も最近では女性の活躍を応援しているとかで、数ヶ月前にそういった趣旨の大きな新聞広告を見た。広告だけのことでなく実態も変化できたのであれば喜ばしい。

大学院修了後は博士研究員として、米国で2年間を過ごした。優秀な男性准教授が保育園に子供を迎えにくくするために夕方早くに研究室から居なくなったり、赤ちゃんを教授室に連れてきたり、周囲も違和感なくその状況を受け入れているようであった。また、女性教員や女子大学院生が日本に比べるとかなり多く、優秀で生き生きとしており、空き時間を利用してスポーツジムに行ったりしていた。日本では12時間以上研究室に「とにかく居る」ことが良いとされ、実験室や図書室では男子学生が昼寝したり男性教員がひげ剃りをしたりしてなんとか長時間滞在を実現しているようなところもあったが、米国ではいわゆるワーク・ライフ・バランスのとれた働き方をしている研究者が多かったということであろう。日本には今、ようやく「変わるかどうか」という時期が来たようである。

室蘭工業大学は、平成25年度「科学技術人材育成費補助事業 女性研究者研究活動支援事業(一般型)」に選定された。私はこれまで北海道大学やお茶の水女子大学で支援(育児中の研究者への研究支援員配置など)を受けてきた経験を活かし、支援する側として室工大で男女共同参画推進に力を注ぐことになった。「工学の女性は少ないので」と言う大学関係者は多いが、まだまだ優秀な女性研究者は日本に(あるいは海外にも)多い。魅力ある大学として多くの研究者から選ばれるように、そしてその力を十分に発揮してもらえるように、ジェンダー平等環境の整備に努めている。